

昭和32年度原子力予算に関する要望

昭和32年1月10日
原子力委員会

1. 原子力委員会は昭和32年度原子力関係予算として約122億円を必要と見積り、各方面の理解と協力を要請して来た。

2. その主たる内容は次の通りである。

(イ) 日本原子力研究所の研究態勢の整備

本年度はわが国最初のウオーターボイラー型原子炉が稼働し始め、続いて既に登録済のCP-5型原子炉も

要 求 点

据付けられるがその利用目的である技術者の養成訓練及び必要な研究実験のための日本原子力研究所の人的、

物的態勢の整備はあげて32年度予算に持越されており至急その整備を計る必要がある。

(ロ) 国産1号炉築造の具体化

過去34年に亘り国立試験研究機関、民間企業及び日本原子力研究所で研究を進めて来た国産原子炉築造

の準備は漸く実を結ぼうとして居り、32年度においては、これらの研究の成果を結集して愈々築造に着手する

必要がある。

(i) 動力炉建設のための準備

緊迫したエネルギー事情から原子力発電に対する期待は極めて大きく、32年度においては官民研究機関において

動力炉建設の素地を培養すると共に国内燃料資源の開発利用に努めなければならない。

(ii) アイソトープ利用の促進

アイソトープの利用の将来は医、農、工各部門において計り知れぬ成果が期待され、産業貿易の構造にも

劇期的変革が予想されるのでその研究の促進は特に留意されねばならない。

3. 過去34年間の日本における原子力の開発は、いわば播種期にも比すべきものであった。32年度は過去の努力の結果

果漸くにして生れ出た芽をばくく~~み~~み育てる成長期に入る課であるが、万一にもこの際必要な最少限の予算さえも

確保されぬということに亘れば、折角生い出た芽も立ち枯れの外なく、漸く諸外国に奪われて立上ったばかりの我が国

の原子力開発は再び諸外国との差をひろめるばかりとならう。

4 世界各国における原子力開発への熱意は今更説くまでもないが、何れも原子力の重要性を認識して、開発利

用のためには莫大な国費の支出も惜むことがない状況である。原子力開発には上記の外尚技術者の

養成訓練、放射線の障害防止等相応な経費を必要とするが、今や国際原子力機関の成立を控へ立ち遅れた

わが国も漸く国際的注目の舞台に立たうとする転換期に

際会し本委員会の原子力予算に対する見積額は必要

已を得ない額であることを認識され^{その確保を}重ねて~~その確保~~確保を要望する次第である。

(イ) 研究用原子炉受入れに伴う日本原子力研究所の
研究態勢の整備

(ロ) 過去34年間の国内における研究の成果を結集させる
ための国産1号炉築造の具体化

(ハ) 緊迫したエネルギー事情に鑑み動力炉建設を早めるため
の準備

(ニ) 原子炉燃料を出来るだけ自給するための国内燃料資源
の開発利用

(ホ) 医療、農工その他凡ゆる部門において劃期的変革をもたらす
ことの期待出来るアイソトープの利用促進

(ヘ) 原子力開発の前提としての研究者、技術者の養成訓練

(ト) 原子力開発と並行して万全を期さねばならぬ障害防止
のための諸措置

(チ) 国際原子力機関をはじめ各国との協力態勢の確立